インタビュー

いま、あなたに伝えたい

法政大学総長

田中優子さん

たなか　ゆうこ／神奈川県生まれ。江戸時代の文学・生活文化研究者。2003年法政大学社会学部教授、2014年より法政大学総長。著書に『江戸の想像力』（ちくま学芸文庫）、『鄙への想い』（清流出版）『自由という広場』（法政大学出版局）ほか多数。

生きるために対話する

ゼミの学生を見ていて、「誕生日は家族で盛り上がります」という発言をときどき耳にすることがありますが、「家族で盛り上がる」ってどういう意味だろうと思ったことがあります。

なにか家族とのコミュニケーションのあり方が変わってきていて、ごく普通に一緒にいるのではなく、一生懸命共通のものを探すとか、みんなで盛り上がる日をつくるようにしないとつながりを保てないような状況になっているのではないかと、その時に感じました。そうだとしたら、家族と話すのも面倒くさいな、と思うこともあるのかなと思います。

一方で「話さなくてもわかってくれるだろう」という現象は日本のなかにはまだまだ多いです。たとえば「呼吸でわかる」というように。しかし、そんなことはありえません。

国内の状況を見てみると、経済的にはもうそんなに豊かではないし、いろんな災害も増えてきていて、孤立していては生きていられない社会になってきています。そして、そのような状況は国際的に起こっているので、これからは日本語だけではない環境のなかで、いろんな言語と共にさまざまな人と、コミュニケーションをとらないと、そもそも生きていけない、仕事ができない、仕事がないということになってくるはずです。だからこそ、生きるために対話した方がいいと私は思っています。

世代間のズレや価値観のちがいも含めて、自分はなにをしたいのか、なにを考えているのかということを、お互いに言葉でちゃんと説明しなければいけません。自分自身の生き方をするというのはそういう意味なので、なにもしないで、コミュニケーションをとらないで自由を生き抜くことはできません。

たとえば、親に自分の思いを伝えるときに、親の言い分もあるかもしれませんが、その言い分もちゃんと聞いて「そういう価値観なのか」「ズレてるな」と思いながらも、それはそれでわかった、けれども実はちがう、社会はこういう風に変化しているんだと逆に説明して、だから自分はこう生きていくんだと言わなくてはなりません。聞く耳をもちながらも言うべきことは言うという関係をつくっていくことが対話なのです。

第2回 対話と読書

読書は言葉を自分のものにする

対話をするときに私たちは言葉が足りていないんです。自分のなかを本当はどう感じているんだろう、どう考えているんだろうと探っているときに、社会のなかで与えられた言葉では間に合わなくなるので、言葉は多い方がいい。つまり自分のなかに語彙が多い方がいいし、論理や論議の構造をもっていた方がいいし、言い回しもたくさんもっていた方がいいです。では、それをどこからもってくるのか。学校の教科書ぐらいでは絶対に足りない、だから読書をするんです。

本を読めばそこに自分のほしかった言葉があります。ただ、そのためにはたくさん読まなくてはなりません。言葉は出会うものですから、たくさん読んでいるうちになにかに出会います。出会ったらそれを必ず覚えておく、あるいは書き留めておく、そうして言葉を自分のものにしていきます。

読書は言葉を自分のものにするためにある、そうすることによって自由を生き抜くことができるのです。

田中優子さんの最新刊

江戸とアバター
私たちの内なるダイバーシティ

池上英子・田中優子 著
朝日新書

■田中優子が池上英子と共に、江戸の分身たちをバーチャル世界に生きる現代のアバターたちに重ねながら、よりよく生きる方法をさぐる書。